

## 文化

昭和15(1940)年、大政翼賛会傘下の「食糧報国聯盟」の依頼により、奈良県下の主食物調査が行われた。3年前の昭和12年に「挙国一致・尽忠報國・堅忍持久」をスローガンとして、全国民が戦争を支持し協力するように教化する「国民精神総動員運動」が始められた。

筆者は戦後生まれであるが、「国民精神総動員」云々と刻印された陶製の汁碗が自家の戸棚の中に一つだけあつたのを、今もよく覚えている。

昭和14年には第二次世界大戦が始まり、翌年10月には各政党が解散し、大政翼賛会が発足した。

▼食糧報国聯盟  
食糧報国聯盟は、昭和15

## (続) 戦時下的「郷土食」調査

—茶粥—

土食の実態調査だった。  
▼県女子師範の調査  
全国の官公署や教育機関に依頼して実施した郷土食調査は、奈良県下では県女子師範学校家事科によって行われ、半年足らずで『郷土食の研究』(奈良県下主食物之部)

の報告書の庄巻というべき

粥食(茶粥)で、ほとんど

詳細にその方法を調べてお

り、食事の回数や粥の副食などを含めて、80年あま

り前の県下の主食の状況を

綿密に調べた。今では得が

たい、食文化資料となっ

れている。

▼郷土食注目の背景

食糧報国聯盟の郷土調査の全貌(ほつ)と、その

成果が戦時食糧政策などの

ように反映されたかは、不

明であるが、郷土食への取

り組みは他の機関でも行わ

れていた。

昭和16年から、太政翼賛

会の委託を受けた「民間伝

承の会」(後の日本民俗学

会による「全国食育調査」

もその一つである。

こうした戦時における郷

土食への関心は、米だけに

頼らない地方の食生活に注

目することで、農村部での

米の消費を抑え、圧倒的に

食糧が不足している都市部

へ食糧を供出させる国家的

な食糧政策の一環であつた

のだろうと、六車由美氏は

指摘している(「戦時下の

郷土食研究をどう評価する

か」)『権力』現代民俗誌の

地平2、2004)。

茶粥への総括のなかの

「胃腸を害しやすい」とし

た問題とともに、忘れては

ならない視点であろう。

(しかたに)いさお=奈良

民俗文化研究所代表

|| 次回は10月7日付 ||

## 民俗通信

23 鹿谷 勲



郷土食の研究  
〔奈良県下主食物之部〕

『郷土食の研究[奈良県下主食物之部]』の表紙(1941年3月刊)

## 節米には推奨されず

栄養基準の決定、野生食用植物動物の調査、戦時非常食国民食パンの創製などを行っていた。さらに戦時の「国民食」の普及実践の前提として行われたのが、地方の慣習食事、いわゆる郷

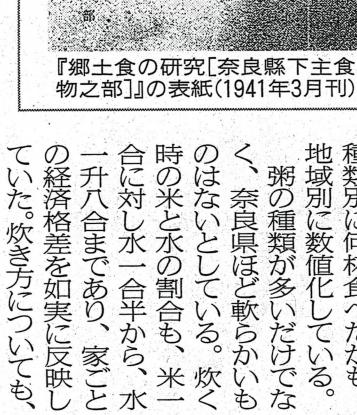
月堂食堂作法」が紹介され、練行衆の深夜の夜食「揚茶粥(あげちゃがゆ)」にも言及している。其の一として「法論味噌」(ほうみそ)についての文献調査が詳しく報告され、其の三が、こ

らは、各政党が解散し、大政翼賛会が発足した。

白米粥・茶粥・麦飯粥など種類別に何杯食べたかも、地域別に數値化している。粥の種類が多いだけではなく、奈良県ほど軟らかいものはないとしている。炊く

粥は、粥食は戦時下の節米方法として相当の注意をひく要素を持つている。辯治郎は、粥食は戦時下の粥を書しやすい」としながら、「保健衛生上の見地から、胃癌(がん)症状患者は、胃癌(がん)症状患者頻出等の実情と照り合った問題とともに、忘れてはならない視点であろう。

(しかたに)いさお=奈良



『郷土食の研究[奈良県下主食物之部]』の表紙(1941年3月刊)